

映画を利用した英語の授業とその留意点

太田 まり子

映画を利用した英語の授業とその留意点

太田 まり子

はじめに

私は埼玉工業大学で1996年度から、「一般英語」と「工業英語」を担当してきた。双方の科目で、主にはリーディング用テキストを使ってリーディングを主眼とした授業を行ってきたが、年に数回は映画を教材にして授業を行うことがあった。本稿の第1節では、映画を利用した授業についての報告を行う。

本稿の第2節では、ハリウッド娯楽映画についての私の見解を述べる。というのは、これまで私が授業で利用した映画はすべてハリウッド娯楽映画であったが、これらを繰り返し見ることを通じて、これらの映画を教材として利用する際の留意すべき点に思い至ったからである。その留意点とは、これらの娯楽映画のもつ、いわば「思想なき思想」を知る必要があるということである。このことを、後半で映画論として論じる。

第1節 映画を利用した授業

(1) 映画を利用した授業の効果

本学の学生だけに限ったことではないが、実際の場面で英語を使って会話をした経験がある学生は、いたとしてもごく少数だと思われる。学生と英語のこれまでの関係は、教育の場で教科書や教育用教材で習ったというものに限られる場合が多いだろう。実際に英語が使われる場面に遭遇し、自分も使ってみるという体験は少なかったはずだ。

映画を通しての英語学習のもたらしてくれるものは、第一に、学校で習ってきた英語が、本当に使われるものなのだという点を端的に実感できる点にある。

例えば、SF映画『ジュラシック・パーク』(1993年公開)の中に次のよ

うなセリフがある。

“It could have been worse, John. A lot worse.”

これは、開園を間近に控えた恐竜公園の技術者のセリフで、外部から査察に訪れた数人がはじめて恐竜見学用の車に試乗し、車庫に帰ってくる場面で話される。見学ツアーの車は、お目当ての恐竜に出会うことなく、ハリケーンのために途中で引き返してくるのだが、それを本部センターにいる公園のオーナーのジョンがモニターで見て、見学ツアーの不成功を残念がる。そこに居合わせた技術者は、公園のシステムの技術面に不安をもって、「もっと悪いことが起きる可能性だってあったんだ。もっともっと悪いことがね」と社長の無警戒ぶりに警告を発する。それが上のセリフだ。このような文は、仮定法過去完了の文として、高校英文法の最終段階で学習することになっていて、日本人の感覚では、文法的に難しい表現だ。それが日常のごく自然に使われている。このシーンの学習で、学生は仮定法過去完了の文が「本当に使われるんだ」と実感できると思う。映画の英会話の学習は、英語を実際に使う機会の少ない学生にとって、現実の使用例に触れる貴重な機会になり、既習の文法事項にいわば血と肉を与えることができるものだと思う。

第二に、文の意味を理解し、印象的に記憶できるという点でも、映画のセリフの学習は得るものが多い。上にあげたセリフでは、「もしシステムの故障でも起きていたら、もっと悪いことが起きたかもしれない」という「過去の事実と反する仮定の帰結」の意味合いがよく分かる。つまり映画のもつストーリー性と、その場面におけるセリフの的確さによって、文の意味が容易に理解でき、印象も強い。しかも、その技術者の言う「もっと悪いこと」は、映画の物語が進むと現実のものになるため、このセリフはますます重要なものになる。

映画のセリフは、よく吟味された無駄のない的確な表現である場合が多い。映像のもつインパクトと、プロットの中での重要性のゆえに、セリフは記憶にとどめ易く、英会話学習の理想的な例文である場合が多い。私は学生に、映画で学んだ英会話を記憶し、学習の場を離れた実際の場面でも役立ててほしいと希望している。

(2) 映画の選択

教材用の映画を選ぶ際には、シナリオが書籍として市販されていること

がまず必要だった。加えて多くの学生が見ていると思われる映画、工学部の学生が興味を持ちそうな話題が主題になっている映画がよい。その上で、実際の場面で使える会話文を含むこと、スラングが多くないことなどを考慮した。その結果、これまで利用した映画は、すべてハリウッドメジャースタジオ製作の娯楽映画になった。つまり『ゴースト ニューヨークの幻』『バック・トゥ・ザ・フューチャー』『ミッション：インポッシブル』『ジュラシック・パーク』だ。

ここで、授業で利用した映画について、教材に選んだ理由と場面を簡単に述べたい。『バック・トゥ・ザ・フューチャー』については後述する。

*『ゴースト ニューヨークの幻』(1990年公開)

1997年度前期にはこの映画の1場面を紹介し、その中の英会話を練習した。取り上げた場面は、主人公が銀行の預金を解約に行く場面だった。この場面には、「これこれの額を引き出します」というような、銀行員と客の会話があり、役に立つ表現だと考えた。

*『ミッション：インポッシブル』(1996年公開)

人気男優トム・クルーズが主演したサスペンス・アクション映画。この映画を取り上げたのは、インターネット上でのやり取りが、物語の展開の重要な要素となっていて、コンピュータのモニタ画面がたびたび登場し、操作が行われることから、学生にとって有益であると思ったからだ。私が授業で取り上げた1997年度後期は、まだインターネットに接した経験のない学生も多い時代であった。

*『ジュラシック・パーク』(1993年公開)

この映画は、コンピュータ・グラフィックスを駆使した近未来SF娯楽大作であり、世界中で大ヒットした。1999年度にこの映画を教材として取り上げた際には、45人のクラスで、見ていない学生は、2~3人だけだった。この映画の物語では、科学者たちが、地中深くから琥珀を掘り出し、その中に閉じこめられていた蚊の血液から、恐竜のDNAを抽出、修復し、最新のバイオテクノロジーを使って恐竜を現代に蘇らせる。2000年度後期の授業では、この映画の2つの場面を取り上げた。一つは恐竜復元のための遺伝子操作とクローン技術が説明される場面で、これは、今日のバイオテクノロジーがそれに近い研究を実際行っていることもあり、工学部の学生に役立つ話題と語彙があると思われた。もう一つの場面は、恐竜に人間が襲われる場面で、ここでは、「電気が切れている」「じっとしている」とい

うような、緊急時・非常時の会話文が頻出し、学習の価値があると思われた。そして、この二つの場面から、先端科学技術への過信に対する警告というこの映画のテーマを読みとることができれば、単に英語学習という意味を越えて学生たちの参考にもなるだろうと考えた。

(3) 2000年度前期における「一般英語」(1年生対象)の授業実践

「一般英語」の科目は、本学各学科の1学年時に週1コマ(90分)の必修科目となっている。クラス規模は約45人で、ほとんどが男子学生である。「一般英語」の授業は、一般的な英語の運用力を4技能(聞く、話す、読む、書く)にわたって習熟させることを目指すものである。

2000年度前期の「一般英語」の授業では、前半はリーディング用テキストを使って、英文の読解および文法的な理解を目的とした授業を行った。そのような授業形式では、「聞く、話す」能力の育成がおろそかになるきらいがあるので、それを補う意味で、後半の5回の授業を使って映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(1985年公開)を利用した授業を行い、学生に英会話を聞き、話す機会を提供した。

『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(第1作)は、日本でも大ヒットしたSF娯楽映画だ。発明家のドクター・ブラウンが、タイムマシンを発明し、過去の時代へのタイムトラベルが実現する物語で、奇想天外ながら、発明ということのワクワクするような楽しさをよく伝える映画である。また、工学部生に知って欲しい語彙や表現がたくさん出てくることも、選んだ理由だった。例えば、次のようなセリフがある。

“My experiment worked!”

“If my calculations are correct ...”

“... clock is exactly one minute behind mine and it's still ticking.”

“That was the day I invented time travel.”

授業は次のように行った。(番号区分は実施順を表し、各番号が授業各1回に対応するわけではない。)

〈1〉映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』から2場面(いずれも10分程度)を選び、その場面をビデオで鑑賞し、その部分のシナリオをプリントして渡した(B4で4枚)。プリントには、セリフとその訳をのせ、学生に覚えてほしいセリフ(暗記文)にはアンダーラインを引いておいた。暗記文を選定する際には、次のことを考慮した。文が長すぎず、かつストー

リーの展開のポイントになる文であること、日常使う頻度の高い文あるいは科学技術の基礎的な用語を含んだ文であること。また、暗記文と暗記文の間隔がつまりすぎないようにした。間隔をおくことによって、学生がビデオを見ながら発声する際に、多少ゆっくり発声しても、ビデオの流れに無理なく追いつけると考えたからだ。

〈2〉暗記文について、語句の説明と発音練習をした。

〈3〉同じプリントで、暗記文の英文を白く抜いたプリント(ブランクプリント)を配布した。クラスを5人程度のグループに分け、各グループが2場面のうちのどちらかの場面を選び、選んだ場面の暗記文を、グループ内で受けもちを決めて暗記するように指導した。一人が一つの役を受けもつロールプレイ方式、あるいは単純に行数を人数で割って、役を無視して順に暗記するやり方のいずれでもよいとした。結果としては、後者のやり方をとったグループが多かった。この場合、一人が7~8行の文章を受けもつことになった。

〈4〉グループごとにビデオの日本語字幕を見ながら、クラスの学生たちの前でセリフを言う発表の場をつくった。学生はマイクを持って、暗記したセリフを映画の流れと同時に話すこととした。そのさい、ブランクプリントのみを見てよいことにした。学生は往々にして声が小さいので、学生の発表の際にはマイクを使った。また、ビデオの音量は小さめに聞こえるようにした。映画の音を完全に消してしまうと、タイミングが分かりにくいからである。気になったことは、発表を早く終えた学生が、その後もビデオの同じ場面を数回見ることになり、退屈そうにしていたことだった。この点は改善の必要があると感じた。

以上のように授業を行った。

私が教えている工学部生の場合、英語が得意という学生は少数だ。そのような学生に映画のセリフを暗記させて発表させるのは、無理なのではないかと考える向きもあるだろう。しかし、昨年までの例でも、今年の例でも、「自分にはできない」と頑強に抵抗したり、発表をサボるという学生はほとんどいなかった。今年も、はじめに「無理だよ」と言っていた学生が少数数いたが、発表当日までにはなんとか暗記して、当日出席の学生は全員発表を行った。私のこれまでの経験では、学生は決して人前での発表がきらいではない。むしろ、カラオケ世代の若者たちは、人前でマイクを握ることには慣れている。ただ、英語での発表には慣れていない。そこで、

教師の「去年の学生も出来たのだから、きっとできる」という信頼と励ましが必要になる。セリフを暗記するのは、学生にとっては大変な作業であるようだ。しかし、その大変なことを達成することにより、充実感が得られ、また人前で英語を話すことで、プレゼンテーション能力が開発されると思う。

2000年度の前期末には、大学所定の用紙による「学生による授業評価アンケート」が実施されることになった。私は「一般英語」の授業でこのアンケートを実施する際に、「意見・希望記入欄」に、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』を利用した授業についての感想を書いてほしいと学生に指示した。履修者42人中、アンケート提出者は34人で、その全員が記入欄へ感想を書き込んでくれた。その一部を紹介する。

18人は積極的な評価だった。「日常で使う会話を覚えられてよかった」「おもしろかった」「ビデオも授業も非常に楽しかった。後期も前期のようにやってほしい」「あまり経験がなかったのでやってよかったと思った」「なかなかできない、いい経験をさせてもらいました」「いままでの高校などの授業と違ってとても興味もてた。ビデオを使っただけの授業をもっとやってほしい」など。「もう少し文を暗唱させてもいい」という意見には、学生の頼もしさを感じられた。

また、これは積極的な評価かどうか分からないが、「ビデオを最後まで見たかった」(6人)という意見があった。

消極的な評価もあった。「あまり楽しくはなかった」「とても無意味に感じた」が各1人。「他の人がやっている時、退屈だった」というような感想が4人。「映画の会話が早すぎる」というような意見が3人だった。

このアンケート結果から、学生に学習目的がおおむね理解され、好意的に受け入れられていることが分かった。そして、毎年感じることだが、映画利用の授業を終えたとき、学生との距離がぐっと近くなっている。これは、ポピュラーな映画を教材として学んだことからくる親近感ということもあるだろうし、もうひとつは、難しい課題を励まし合って乗り越えたことからくる充実感と共同意識もあるのではないだろうか。

第2節 娯楽映画の教育上の問題点

娯楽映画の英語教育教材化はこのように教育効果が高いが、そこには思

いもかけない問題がある。娯楽映画を無批判に教材として利用していいのかという問題だ。教材として利用する利点があるのだから、利用するのはいい。しかし娯楽映画の性質をふまえ、内容に関して、批判すべき点は学生に伝えつつ用いる必要があると、私は考えるに至った。

ハリウッド娯楽映画には、アメリカのメジャーなものの見方が端的に表れている。例えば黒人(アフリカン・アメリカン)の登場人物は、往々にして白人の主人公を助ける役割を負わされる。しかもたびたび黒人は白人を助けて死んでしまう。黒人の登場人物が、白人の男女のカップルを結びつける仲介役になることも多い。あたかも黒人は白人の従順な仲間ようである。そこでは、アメリカの黒人の歴史や現実は無視されている。ハリウッド娯楽映画の思想の一つの側面は、この「黒人は白人の従順な仲間である」ということだと私には思われる。また、アラブ人が敵視される。あるいは「アラブのテロリスト」が悪役の典型として出てくる。この「アラブ人はテロリスト」観もまた、ことに冷戦終結後のハリウッド娯楽映画の思想のようだ。また太った人に対する偏見も描かれている。太った人は悪役かみっともない役にされることが多い。

ハリウッド娯楽映画は、見るものを惹きつけ、飽きさせない究極の面白さを追求している。その面白さの陰で、偏見や固定観念にもとづいた安易な人物描写が実に多い。エンターテインメントを目的として、一見無思想に作られているかに見えるハリウッド娯楽映画は、実は多くの歪んだ思想を含んでいると言える。

このようなハリウッド娯楽映画のいわば「思想なき思想」は、さまざまな側面に関して指摘できようが、ここでは紙面の関係から、黒人の役割に関して、授業で取り上げた映画と近年日本でも大ヒットした映画のいくつかに即して検証したい。そのあとで、アラブ人と太った人の役割について、簡略ながら触れておくことにする。

(1) 黒人の役割

その1: 犠牲になる黒人

*『ジュラシック・パーク』の場合

恐竜公園が無秩序状態になり、恐竜が人間を襲い、何人かが犠牲になり、何人かが逃げ出す。映画の最後で、公園から生きて逃げ出す者たちは全員白人だ。黒人のアーノルド(役名)は、ジュラシック・パークの中心的なス

スタッフで、冷静な判断力の持ち主である。彼は公園のオーナー（裕福な白人）の片腕的な存在だ。公園のシステムに関するアーノルドの不安感を的中する。荒れ狂う恐竜が本部の建物に迫る中を、アーノルドは公園内の電気システムをもとに戻すために、勇敢にも建物の外に出て行き、恐竜の犠牲になる。

＊『エイリアン4』（1997年公開）の場合

宇宙船内で乗務員がエイリアンに襲われ、壮絶な戦いの中で、大勢が犠牲になる。ここでも生き残るのは白人のみだ。この映画のキャラクターの設定はやや複雑だ。エイリアンの襲撃から生き残るのは、クローン人間のリプリー（シリーズを通じてのヒロイン）、サイボグの女、車椅子の障害者、顔に大きな傷のある男の四人である。いずれも一癖ある者たちなのだが、表面的には（つまり演じているのは）皆白人だ。生還者の背後には犠牲者がいる。障害者の男の親しい友人である黒人の男は、逃避行の際に障害者の男を背負って逃げ、エイリアンが迫ったとき、障害者の男を助けるため、自らの命を捨てる。

『エイリアン』シリーズは、それまでの女性像を一新する、強い女にして負けない女リプリーを創造した。リプリーは『エイリアン4』では、サイボグの女と力を合わせて、エイリアンの襲撃から地球を救う。その新しい女性像の創出の陰で、相変わらず、黒人は勇敢でたくましく白人のために命を捧げて犠牲になっている。

その2：白人の従順な仲間である黒人

＊『ミッション：インポッシブル』の場合

この映画で、トム・クルーズ扮する主人公を助けるのが、黒人の男である。この黒人は主人公の発した募集に応じてきた男で、これまで誰もやったことのないような困難な仕事を引き受ける。もう一人の男（ヨーロッパ出身の役者が扮している）は主人公を裏切るのだが、黒人の方は最後まで従順に主人公に従う。この黒人は、コンピュータの技術力は天才的で、献身的に働く。しかし報酬に関しては欲がなく、使ったコンピュータなどをほしがる程度だ。まさに主人公（白人）の従順で頼もしい味方である。

＊『マトリックス』（1999年公開）の場合

コンピュータに支配される世界マトリックスから人間を解放する救世主と、その仲間たちの闘いが描かれている。人気男優キアヌ・リーブス扮するネオを救世主と信じ、命賭けで彼を支えるのが、モーフィアスという黒

色の肌のアフリカンの男だ。また、黒人の若者タンクは、技術面で彼らを支える。映画のラストでは、敵の攻撃にさらされて崩壊していく戦艦内で、死後復活したネオと、ネオを慕う女（白人）が見つめ合い抱き合う。ラストで黒人の仲間たちがどうなったかは描かれてすらいない。

その3：超能力で白人を助ける黒人

＊『ゴースト ニューヨークの幻』の場合

銀行に勤める主人公サムは、友人が雇った暴漢に撃たれ、幽霊になる。サムは恋人モリー（人気女優デミ・ムーアが演ずる）に、危険が迫っていることを伝えようとする。しかし幽霊は人間に言葉を話すことができない。そこで黒人霊媒師の女が幽霊サムの言葉を恋人に伝える。霊媒師は命を狙われながらも、サムと力をあわせて、最後には悪い友人を撃退する。

霊媒師は愉快でおちょこちよいで、気のいい女として描かれている。頼まれてサムとモリーの会話をとりもち、二人が心を通わせ合う手伝いをし、抱き合う手伝いもする。この映画はサムとモリーの美しい愛の物語なのだが、それは黒人霊媒師の協力なしにはありえない。黒人は身の危険を冒しつつも、自らの超能力を白人のために使っている。

＊『グリーン・マイル』（1999年公開）の場合

黒人の死刑囚コーフィーは、大男で頭が弱い、予言能力と奇跡を起こす力がある。彼は自分がどこから来て、なぜここにいるのか、いっさい分かっていない。「空から降ってきた」かのように忽然と現れる。彼は人々の苦しみを自分のものとして感じる能力があり、人々の苦しみがこの世にあることがたまらなくつらい。その苦しんでいる人々とはみな白人だ。コーフィーの超能力は、白人のためにのみ使われる。そもそも彼が死刑囚となったのは、殺された白人の双子の少女たちを生き返らそうとして果たせず、逆に少女たちを殺したと誤解されたためだった。彼は処刑される直前に、その少女たちが天国で楽しそうにはしゃいでいる夢を見て、感動する。コーフィーにとって白人の少女たちのあどけない姿は、天使のように感じられ、自分のすべてを犠牲にしても守るべきものだったのだ。

コーフィーは収監された刑務所で、看守ポール（人気男優トム・ハンクスが演ずる）の病気を治し、ポールに不死の力を与える。また末期ガンに苦しむ刑務所長の奥さんをも、力を振り絞って完治させる。処刑の前に最後に何か希望があるかと聞かれて、ポールは活動写真を所望する。活動写真で白人の男女がダンスをする（女は白いドレスを翻して踊る）場面を見

て、コーフィーは感動し「あれは天使だ」という。そして彼は「生きるのに疲れた」といって、従順に処刑される。

看守ポールはコーフィーが「神の使い」だと思うが、それが真実かどうかは分からない。はっきりしていることは、コーフィーの思い描く天国には白人の少女や女が天使のように集っているということだ。コーフィーは黒人でありながら、白人的な価値観と美意識を身につけていて、自分というものがなく、白人のために奇跡を起こして、死んでいく。

これまで見てきたように、ハリウッド娯楽映画では、黒人（アフリカン・アメリカン）が、白人を助ける、あるいはその果てに犠牲になる、あるいは白人の男女を結びつけるという役割を担うことが多い。黒人は勇敢でたくましく、時には超能力をもつ。ある場合には有能で、ある場合にはおっちょこちょいで愚鈍である。しかしその黒人の力は白人のためにのみ使われ、その性格は白人につごうがよい。

このような黒人の役回りは、1939年製作の『風と共に去りぬ』にすでに現れている。この映画の中では、奴隷解放以後もスカーレット・オハラに仕える黒人メイドのマミーや、スカーレットを「お嬢様」と慕う黒人の男ビッグ・サムが登場する。南北戦争が終ってからのシーンで、スカーレットは一人で馬車を御して危険な場所を通り抜けようとして、ならず者たちに襲われる。これを見た元奴隷のビッグ・サムは駆けつけて彼女を助ける。この映画では、白人の主人とそれに仕える黒人の関係が、奴隷制の悲慘さをなんら伝えることなく、白人中心の立場から描かれている。

公民権運動を経た今日のアメリカでも、娯楽映画では白人を助ける従順な黒人という役回りがなお一般的なのである。ハリウッド娯楽映画におけるこのような伝統的な思想を、私たちは見逃してはいけない。

(2) アラブ人の役割

*『バック・トゥ・ザ・フューチャー』¹の場合

ドクター・ブラウンの発明したタイムマシンは、プルトニウムを燃料にして動く。ドクターは、そのプルトニウムを「リビアのテロリストグループ」から手に入れる。この「リビアの過激派」はプルトニウムを原子力研究所から盗みだし、ドクターに核爆弾の製造を依頼したのだ。ドクターはこのプルトニウムを流用し、タイムマシンの燃料にし、「過激派」にはインチキ爆弾を渡す。そのために彼らに命を狙われ撃たれて死ぬ。この死は、

ドクターの友人（この映画のヒーロー）とタイムマシンの活躍で、歴史が変えられ、最後には回避される。「リビアの過激派」は核爆弾を手に入れようとする危険な集団として、またインチキ爆弾に怒って、簡単に人を殺してしまう悪役集団として描かれている。しかしこの悪役は、ドクターの死とその逆転回避というこの映画のクライマックスを形成するのに、必要不可欠な存在なのである。

＊『トゥルーライズ』（1994年公開）の場合

人気男優アーノルド・シュワルツェネッガー主演のアクション・コメディ大作。核兵器によってアメリカの主要都市を破壊しようとする「アラブのテロリスト」と、主人公が対決し、テロリストは滅ぼされ、主人公はアメリカの危機を救う。シュワルツェネッガーのアクションが見せ場になっている。テロ集団の首謀者は、目をむいて狂信的な発言をし、仲間に対しても威張り散らす、いかにもどう猛な悪役だ。「アラブのテロリスト」は正義の味方（主人公）の活躍を成立させるための、いとも便利な国家的な敵になっている。

冷戦時代の悪役はソ連であったが、冷戦終結後はそれが「アラブのテロリスト」になったと見ることができよう。「アラブの」というと「テロリスト」と口をついて出るほど、アメリカ映画では有名な悪役だが、その連想はアメリカ的偏見であり、オリエンタリズムの産物でもあるということをお忘れてはならないと思う。

(3) 太った人の役割

＊『ジュラシック・パーク』の場合

恐竜公園が混乱に陥ったのは、非常に太ったネドリーというシステムエンジニアの仕業による。彼は以前より支払われる賃金に不満をもっていて、恐竜の胚を公園から持ち出して売り、大儲けしようと、公園内の電気系統を混乱させて逃げたのだ。彼こそこの映画の一番の悪役だ。彼はスナック類を常食し、彼の机の周辺は空袋などで目もあてられないほど散らかっている。ネドリーは逃げるときに道を誤り、恐竜に襲われて死んでしまう。

公園のシステムの混乱と恐竜の暴走は、この映画の物語の成立上必要不可欠だ。そのために悪い企みをもつ存在が必要で、それが太った人によって担われている。しかもその役は、金銭欲の強いだらしない男として描かれている。

*『ショーシャンクの空に』(1994年公開)の場合

主人公は無実の罪で刑務所に入れられる。同じ時に入所する者たちの中に、太った男がいる。彼は臆病で、最初の夜に「ママ助けて」と大泣きし、看守たちに暴行を受け、その夜のうちに死んでしまう。それと反対に主人公は弱音を吐かない。この太った男の存在と死により、刑務所の看守たちの非情さと違法性が端的に描かれ、主人公の所内での苦勞が予想されるという効果が生まれている。同時に太った囚人の憶病ぶりが主人公のたくましさを際立たせている。

このように、映画のストーリーの成立あるいは効果のために、太った人が悪役あるいはみっともない役にされている。ここに、太った人に対する偏見が見てとれる。

(4) まとめにかえて

上に述べたように、ハリウッド娯楽映画には、さまざまな偏見や固定観念がひそんでいる。これまであげた映画はいずれも、それぞれの年に日本でもトップクラスの観客動員数を記録し、特に若者たちの圧倒的な支持を得ている。学生たちも大多数が見ているだろう。日本の若者が娯楽映画というメディアを通して、知らぬ間に歪んだ見方を受け入れていくことも考えられる。例えば、格好良いのは白人で、黒人は従順に従うものだという見方が、学生たちに浸潤しているのではないだろうか。

娯楽映画を教材として利用する際には、慎重な対応があってしかるべきだということを、私は自戒の意味をこめて主張したい。授業で利用することは、奨励を意味する。ハリウッド娯楽映画の教材化には利点も多いが、取り上げる際にはその持つ思想について教師が理解し、批判的な視点を忘れないことが必要だろう。

参考文献

- アルク英語企画開発部編『ジュラシック・パーク』アルク、1999年
 新田晴彦翻訳・解説『ゴースト』スクリーンプレイ出版、1995年
 曾根田憲三監修『ミッション・インポッシブル』スクリーンプレイ出版、1997年
 菅孝子監修『バック・トゥ・ザ・フューチャー』スクリーンプレイ出版、1994年

Using Movie Videos in English Lessons: Effects and Problems

Mariko Ohta

I have used Hollywood entertainment movie videos in English classes for five years. Watching movies and memorizing lines is a good means of English conversation practice. Students can easily understand the situations in the movies and can, therefore, more easily remember the words. However, I have recently found that Hollywood movies have certain elements which are not really suitable for classroom use. I think one must have a critical eye when using such movies in classes.
